

「郵便不正」元厚労省女性局長 「女は一生に一度 理不尽な目にあつもの」

郵便不正事件で逮捕されたが、全面否認したまま起訴された元厚労省局長・村木厚子被告（53）。再三の保釈請求がようやく認められ、大阪拘置所を出たのは十一月下旬のことだった。五カ月余りの拘置所生活では、専門の福祉関係の本を中心に、約百五十冊を読破したという。

とはいっても、その中には『阪神タイガース選手名鑑』も含まれていた。長い交流がある障害者福祉関係の友人が話す。

「村木さんは別に阪神ファンだったわけではないんです。ただ、拘置所内で時々聴けるラジオ放送が、大阪だからほとんど阪神戦のナイター中継。それで、差し入れてもらったのです。面会の折、『大学を出て

から仕事と子育てに夢中で走ってきたでしょう。はじめて長い休暇をもらったよ

うなものだから、普段は出来ないことができる良い機会と思つてます」と淡々と笑顔で話していました

後ろで一つに束ねた髪型をずっと変えず、常にスツピンに近い薄化粧。唯一のおしゃれである真珠のネックレスこそしていないが、規則正しい生活と麦飯中心の質素な食事のお陰でかなり痩せたように見えた。

友人が続ける。「以前に一度読んだことのある『ふつうの場所』（ふとう社）という本も希望して読んだそうです。これは施設にいる障害者の実情を彼らの証言を主に構成したルポですが、面会したとき、『施設で生活する障害者の皆さん

が、如何に大変なのか実感しました』と言っていた。前回読んだ時も頭では理解していたと思いますが、自分も狭い拘置所に閉じこめられたことで全く違った受け止め方ができたのでしよう。裁判が終わったら、仕事に復帰したいと希望しています」

保釈後に会食した、という厚労省関係者が明かす。

「受験を控えたお子さんがいるのですが、夏休みの間、大阪の知人宅に寄宿し予備校に通っていた。だから平日は毎日、その子と面会できたそうです。取り調べに当たった検事は二人。一人はとても紳士的だったが、もう一人は強引で高圧的だったそうです」

なぜ頑張り通すことができたのか？ と質問すると、村木被告はこう語った。

「女というのは、一生に一度は必ず理不尽な目にあわなければいけないものだ、と考えてきました。今がその時なのだ、と思つたのです。いつも子供に毅然とした姿を見せなければ、と思

うと勇気が湧いてきて、投げ出しては駄目だと思つた。泣いていても何にもなりません。涙が流れても、ほんの少して泣きやみました」

七月四日の起訴後、村木被告の無罪を訴えて、堂本暁子前千葉県知事や『行列のできる法律相談所』の住田裕子弁護士、浅野史郎前宮城県知事らが、厚労省内で会見を開くなど支援活動が盛り上がっている。

厚労省担当記者の話。「省内にも支援者に名を連ねているのが複数いる。そもそも村木被告の罪名が虚偽有印公文書作成・同行使、つまり証明書を係長に命じて偽造したという点で到底あり得ない、というの

です。理由は幾つもありますが、証明書発行の権限者の村木さんならば、たとえ政治家案件だとしても、通常通りの必要書類を整えさせれば済むから、偽造の必要は全くない。大半の職員が検察の描いた構図は荒唐無稽だと見ている」

社会部デスクによれば、「検察幹部は自信を持っていて、判決はどうなるか。恐らく長期裁判になると思います。一月から始まる公判の行方は予断を許しません」



「はじめて長い休暇をもらったようなもの」(村木元局長)